

知(智)というものは姿の美しい言葉である。この中には核となる原義があるはずだが、私たちは冠される言葉の方向に惹き寄せられて独自の意味を把握する場合が多い。

たとえば、神知(智)、人知(智)、教知(智)、機知(智)などで、それぞれ上の文字を \wedge 知 \vee が照射してそれに見合った影絵として映し出す。神智ならば神的な知の像ができるわけである。

中世からルネサンスにかけての \wedge 知 \vee の移り変わりは第一章でも多少触れたように、神智から人智へのものだが、もう少し詳しく述べてみると次のようになる。

つまり、中世の世界観というのは神の永遠の相の許に一定してあったのだが、ルネサンス期の人たちは、ギリシア・ローマの古典を発掘して読むことによって人格形成を行なっていくのを旨とした。ということは中世の、神の永遠の相を許の静止した知でなくて、人格を形成していくという変化のある知が生じてくる。ここに中世との決定的な相違があって、古典の中に精神の自由を求め、さらに政治的知恵も求めていくことになる。神的靜的な知を中世の知とすれば、人的動的な知がルネサンス期の知の特徴と言えよう。

たとえば、中世から存在する自由七学科(文法・弁証論・修辭学・算術・天文学・音楽・幾何学)を有機的につなげて一つの円環としているのが哲学で、この哲学が志向するものが神学とされた。この神学は中世初期には生き生きとしていたのだが、しだいにスコラ的に硬直して、ルネサンス期で批判されてそこから脱皮がルネサンスの知の、強いて言えば文化のひとつの大きな原動力となる。やはりここからも、硬直(靜)から脱皮(動)への転換が看取される。

こうした形態上の変化と同時に、性質の方はどうかというと、中世初期の大教父時代の知の特徴は、知を三位一体のうちの \wedge 子なる神(キリスト) \vee と同一視して、異教徒の知や単なる人間・自然の事柄といった世俗知に對立するものとみなし、根本的にキリスト教者の識見として解釈した。一方、十五、十六世紀のルネサンス期になると、宗教的意味合いは排されて、古典古代への意識的回帰によってキリスト教の啓示から離れることになる。

十六世紀まで知は、完全なる人間形成、普遍的な知識体得の糧となるものとされた。言い換えれば、生きていくうえで不可欠となる精神的營養を意味し、人びとは知を得ることで自己の存在理由を見出した(汎知主義)と述べても過言ではないであろう。

知的行為を、目に見えない知的で無限なる粹を瞑想することだとしたアウグスティヌスが志向した神智を、ルネサンス期の知識人は忍耐強くゆるめて、古典古代の自立性と純粋な人間の尊厳を導入していったのである。

本章では最も身近な知とも言える \wedge 機知 \vee を主題とした説話から出発して、ルネサンス期の知のタイプを『カルダノ自伝』を基軸に分析し、写本や印刷術によって知がどのように流通したかという知の流通過程にまで話を進め、つづいてさまざまな知的営為の広がりを経ることにする。

1 死に際の際知

最低の人間

人は死に際に何をどう告白するか。これは人の一生において最も興味ある問題だと思われる。告白の内容、告白の仕方によって、その人の人となりが最終的に判断されるからである。特に \wedge 懺悔 \vee という宗教的な行為を持つキリスト教文化においては、人生のハイライトとなりうるであろう。

『デカメロン』一日目第一話は、その臨終の際の懺悔が話の焦点となっている。話の主人公、チャッペレットは浅からぬ因縁によって、ボルゴニヤ(フランス東部のブルゴニヤ地方)の人びとの貸付けの取り立てを